

久里浜天神社社報 てんじんさま

平成26年3月1日発行 第113号
発行所 久里浜天神社社務所
〒239-0831 横須賀市久里浜5-19-1
TEL046-835-3703 Fax 835-3503
ホームページURL tenjinsha.or.jp



3月
弥生

HP ほほ毎日更新中

本日はよくお参り下さいました

受験シーズンも終わりを告げようとしています。皆さんいかがお過ごしでしょうか。さて、2月26、27日に久里浜天神社氏子会の参宮旅行がありました。愛知の岡崎天満宮、伊勢の二見興玉神社を参拝し、最終目的地、伊勢の神宮を訪れ外宮内宮に詣りました。外宮では神楽を上げ、3月末日をもって解体される、古殿地と呼ばれる旧社殿を拝観。20年間大神様のお住まいであった御社殿は傷みがはげしく、ご遷宮の必要性を改めて感じました。その後、昨年夏完成したばかりのせんぐう館を見学。ご遷宮の意義や宝物の製作過程、実寸大の正宮御本殿の複製模型があり、ご遷宮とは、神宮がなぜ特別な神社なのかということがよくわかる施設でした。日本人として生まれた私たちが国の歴史とともにある神宮をお参りすることで、原点回帰といいますか、とてもすがすがしい気持ちになった気が致します。旅行中は終始和やかな雰囲気です。会員の懇親も深まった大変有意義な旅行となりました。今月も皆さんのご多幸をお祈り致します。(道子)



ハナテラスちゃん

伊勢市観光PRキャラクター

3日 ひなまつり

ひな祭りの歴史は古く、その起源は平安時代(約1000年前)にまでさかのぼります。その頃の人々は、三月の初めの巳の日に、上巳(じょうし)の節句といって、無病息災を願う祓いの行事をしていました。天地の神に祈り、季節の食物を供え、また人形(ひとがた)に自分の災厄を托して海や川に流すのです。またその頃上流の少女たちの間では今のままごと遊びのような“ひいな遊び”が行われます。長い月日の間に、現在のようひな祭りとなりました。(参考 人形協会HP)

21日 春分



◆宮中でのお彼岸
春季皇霊祭が行われる。

◆彼岸とは

祖先のみたまをおまつりする彼岸は祖霊祭祀の要素をもつ行事で日本にしかない行事であることから、日本民族固有の習俗である祖霊祭祀と仏教の教えが習合した行事と言えます。仏教の教えには、何事もほどほどが良いという「中道」という考えがあり、春分と秋分の日は、昼夜の長さが同じになること。また暑くも寒くもないほどほどの季節であること。太陽が真西に沈む時期なので西方極楽浄土におられる阿彌陀仏を礼拝するのにふさわしい。以上の考えから、次第にあの世をしのび、祖先をしのぶ日として定着していったのでしょうか。

彼岸入り(3月18日)

春分(秋分)の3日前の日を「彼岸の入り」という。

彼岸明け(3月24日)

春分(秋分)3日後の日を「彼岸明け」という。

天神さまの豆知識

神社とお寺の関係は？

仏教は六世紀の中頃に日本に伝わりました。当初、仏教という仏は、日本の神に対して外国の神として受け取られていました。当時、朝廷では、仏教を受容するかどうかで対立が見られましたが、徐々に広まっていきます。そして、仏教が広まるにつれ、主に仏教者の側から仏と日本の神々の関係をどう捉えたらいいか、その考え方が出てくるようになります▼まずは奈良時代に、日本の神々もこの世のあらゆる存在と同じように輪廻の中で苦しむ存在だから、仏教によって救済しなくてはならないといった考え方が出てきます。この考え方によって、地方で日本の神様を救済する神宮寺(じんぐうじ)が神社の境内に建てられる例が出てきました。一方で、日本の神々は仏を守る存在であるとの考え方も出てきます▼仏教はインドで生まれましたが、もともと仏教ではインドの神々を仏法を守る存在として考えます。この考え方によって、寺院の境内やその近所に神社を勧請(かんじゆ)する例が出てくるようになります▼平安時代になると、本地垂迹説(ほんぢすいせつ)という考え方が出てきます。これは仏こそが神の真の姿「本地」であり、日本の神々は人々を救済するために仮に神という姿で日本に現れた「垂迹」であるといった考え方です。この説によって、神は仏と合体(神仏習合)と考えられるようになったのです。また、日本の神々は仏のかりの姿の現れとする考え方から(仏が権り(かり)に神として現れる)熊野権現など権現(ごんげん)という新たな神様の称号(称号)が生まれます▼仏教文化の影響を受けて、神像を作る例も、奈良時代には出てきていました。もともと、日本の神々は、自然の依代(よりしろ)に依りつくものと考えられてきました。それが、仏教における仏像の影響を受けたようです。そして、神社のご本殿に神像や仏像を安置し、神社の境内に寺院を建て、神職と並んで僧侶が祭祀や管理を行う例も出てきました。これを宮寺(みやでら)といいます。ただし、祭祀におい

ては、神職は神式で、僧侶は仏式で行っていました。また、神事においては仏教を入れてはならないとする考え方もありました▼鎌倉時代には反本地垂迹説も出てきます。これは神こそが仏の真の姿であり、仏は神の仮の姿であるとする神本仏迹説(しんほんぶつじやくせつ)です。本地垂迹説は江戸時代までにさらに儒教などの影響もあつてさまざまな考え方に派生してきます▼一方、仏教や道教、陰陽道の影響を受けて成立したのが、修験道(しゅげんどう)です。日本では山々は神々がいらっしやる聖地と捉えてきました。そして、その山で厳しい修行を行い、超越的な力を身につけ、広く人々の救済を図ろうとするのが修験者(山伏(やまぶし))です。その成立の過程からもわかるように、ここでも神仏習合の考え方が進んでいきます▼平安時代になると、真言宗や、天台宗の寺院が山々に寺院を設け、修行のための山岳霊場を作っていきます。そして、各地の山々に修験道場が成立してきます。代表的なものが、奈良の吉野、和歌山の熊野、山形の出羽三山(でわさんざん)、福岡の英彦山(ひこざん)などです▼国学など江戸時代中頃に新たに出てきた思想の影響もあり、明治時代になって神仏習合は廃止され、明治政府は神仏判然令を出します。それは、権現などの仏教風の神号の廃止と、神社からの仏像や仏塔の除去などを内容としたものでした。同時に、僧侶が寺院と神社兼ねて業務を行うことも禁止されました。一部には仏像や宮寺を打ち壊すなど過激な廃仏毀釈が行われるなど混乱もありました▼これにより、神社と寺院の区別を明確にする神仏分離が行われ、修験道も廃止されました。以上のことから、神社とお寺は対立するものではなく、互いを尊重し合う関係にあると言えるでしょう。

神主さん



お坊さん



参考文献『神社のいろは』
平成二十四年二月発行
株式会社